

決まり文句を疑う

もうすぐ夏休みが始まります。

子ども達にとっては、自由になる時間が大きく増えます。開放的になって行動範囲も広がります。楽しいことの裏には、危険なことが潜んでいることもあります。

かつて日本のことを「水と安全はタダ」と表現していた時期もありました。今では、隔世の感があります。児童の安全のために、以下のことをご家庭でも話していただければ幸いです。

1、知らない人についていかない、だけでは危険

子どもにとって「知らない人」というのは、大人のそれとは違うものです。大人のいう知らない人というのは、素性や人格が分からない人のことを指します。

子どもにとっての知らない人というのは、一度も見たことがない人のことです。一度でも見たり、あいさつしたりした人は知っている人になる。知らない人の基準をはっきりさせないと危険です。「お家の人以外にはついていかない」と教えてあげてください。

2、あやしい人には近づかない、では危険

刑事ドラマの犯人役のようないかにもという顔つきで、乱暴な言葉で子どもに話しかける犯罪者はいない。誘拐などの犯罪をしようとする者は、子どもの恐怖心や警戒感を取り除くために、丁寧な言葉遣いで、優しい笑顔で近づいてくる。

以前見たニュースでは、睡眠薬入りの飴を渡された小学生が、犯人のことを「優しそうなお兄さん」と話していました。

あやしい人を具体的に教えておかないと危険です。年齢、外見、性別では、怪しいかどうかを判断できません。

この場合の「あやしい」とは、「ふさわしくない」ということです。その場、その時間にいることがふさわしくない人が「あやしい人」なのです。

周りに人がいない場所で話しかけてくる。

暗い道や暗い場所で声をかけてくる。

普段見かけない人が話しかけてくる。

そういう人には近づかずに、その場を離れるように教えてください。

3、危険な場所には近づかない、だけでは危険

危険な場所だけでは、どんな場所か子どもには分かりません。具体的には、

① 近づきやすく、逃げやすい場所

誰でも入ることができて、簡単に逃げられる場所は危険な場所である。公園や駐車場など、不特定多数が出入りする場所は、犯罪者も簡単に出入りできます。

② 人の目につきにくい場所

犯罪者は人の目に触れることを恐れます。高い塀があったり、木が生茂っていたり、街灯がなかったりする場所は危険です。

近所を一緒に歩いて「ここが危険だよ」と具体的に理由と一緒に教えてあげてください。そうすることで、自分で別の場所でも判断できるようになります。